

国
語

【注 意】

- 【一】 開始の合図があるまで開けないこと。
- 【二】 問題は1ページから24ページまでに印刷してあります。
開けたらすぐにページを確かめること。
- 【三】 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 【四】 字数制限のある問題は、句読点も一字分として数えます。
- 【五】 試験終了後は、まず解答用紙を回収し、そのあと問題用紙も回収しますが、問題用紙には名前を書く必要はありません。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合により本文の一部を改変しています)

時間がたつにつれて、わからなくなってしまう句がある。

古池や 蛙 飛こむ水のおと

この句を初めて聞いたとき、芭蕉はしやうという人は、いったい、何が面白おもしろくてこんな句をよんだのだろうと不思議に思った。

古池にカエルが飛びこんで水の音がした——なるほど、一通りの意味はわかる。「自然しぜんに閑寂かんじやくな境地をうち開いている」
*(山本健吉)といわれれば、そうか、とも思う。

では、芭蕉自身の言葉を借りれば「俳意たしか」でないように思う。

*子規は「古池の句の弁」という文章の中で、この句について「古池に蛙の飛び込む音を聞きたりといふ外ほか、一毫いちごうも加ふべきものあらず」といさぎよく書いているが、それだけではなさそうだ。

この句は貞享三年(一六八六年)の春、深川ふかがわの芭蕉庵あんで催もよおされた蛙の句合せに出された句らしい。

弟子かがみしこうの各務支考くすの『葛の松原』をよむと、芭蕉はカエルが水に飛びこむ音をききながら、まず「蛙飛こむ水のおと」を作った、
□ B、その席にいた其角きかくが上五かみごは「山吹や」がいいのでは、とすすめたが、芭蕉は「古池や」にした——と

いう。山吹か古池か、その席で議論があつたことも書いてある。
其角が山吹をすすめたのは、

*かはづなくみでの山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

などの『古今集』の歌などを思い浮かべたからだろう。

山吹といえは蛙の声、蛙の声といえは山吹をもつてくる和歌の凝こりかたまつた伝統に対して、山吹に蛙の声ではなく、蛙が水に飛びこむとぼけた音をぶつけて大笑いしようとしたのだろう。あの蛙、『古今集』の歌のように鳴きはしないで飛びこんだ、と。

このとき、其角は □ X に立っている。

確かに、上五に山吹をもつてくれれば、それに続く「蛙飛こむ水のおと」は、山吹には蛙の声という決まりきつた古臭ふるくさい取り合わせへの痛烈つうれつな批判になる。これが、この時点で其角が考えていた俳諧はいかいというものだったに違ちがいない。ほかの弟子たちもこれに近い考えだったろう。

それに対して、芭蕉1が其角の進言しんげんをいれず、古池をもつてきたのは、其角たちが考えていた当時の俳諧はいかいというものを、やはり一歩、前へ進めようとしたからではないか。一六八六年春の芭蕉には、すでに、因襲いんしゆうちうへのあらわな批判もひとつの因襲と映っていたのかもしれない。芭蕉は其角や以前の自分自身の俳諧に対する考え方を批判しようとしたのではなかったらうか。

そこで芭蕉は和歌のように「かはづなくみでの山吹」とも歌わないが、其角のように「山吹や蛙飛こむ水のおと」としようとも思わない。因襲にとられるのでもなく、因襲を真向まっこうこうから批判するのでもない。そのどちらも超越ちやうえつした不思議な新しい空間に「古池や」という言葉はある。
2

古池の句は、和歌やそれ以前の俳諧に対する芭蕉の創造的批判の句なのだ。

古池の句が本来もっていたはずの、このような意味合いは、和歌の因襲を意識した当時の俳諧という「場」に、この句を一度、おき直してみなければ、よく見えてこない。

当時の俳諧の「場」とは具体的には、一六八六年春の深川芭蕉庵での蛙の句合せの席だ。そこは、其角が芭蕉に進言した

り、それをめぐって議論がたたかわされたりする活気に満ちた「場」だった。

この句を初めて読んだとき、何かもどかしかったのは、古池の句をとりまいていたはずの当時の「場」の大半が、『古今集』の歌も、其角の進言も、山吹も、長い年月のかたに飛び去ってしまった²いて、即座^{そくざ}に芭蕉や其角たちがいた「場」に参加することができなかつたからだ。支考の『葛の松原』に出会わなければ、このもどかしさは、いつまでも解けなかつたろう。腕^{うで}だったか顔^{かほ}だったか乳房^{ちゅうぶ}だったのか、こわれてわからなくなってしまった古代の彫刻^{ちやうてく}のように。

芭蕉の古池の句は、もともと当時の俳諧という「場」に深く根ざしたものだ。時間とともに、その「場」が失われてしまうと、この句が本来もっていた和歌や当時の俳諧に対する創造的批判という意味が見えなくなってしまった。

そして、残³ったのは、古池にカエルが飛びこんで水の音がした——ただ、これだけである。このような意味でなら、子規の「古池に蛙の飛び込む音を聞きたりといふ外、一毫も加ふべきものあらず」という言葉もうなずける。

それではなぜ、「古池に蛙の飛び込む音を聞きたり」という部分だけが残ったのか。それは今でも芭蕉の時代と同じように古池がありカエルがいるからである。

当時の俳諧という「場」が時間のかたに失われてしまうとともに、そこに根ざしていた古池の句の創造的批判という部分は消えてなくなってしまうが、古池やカエルのような今も変^{かわ}らずにある自然という「場」に根ざした部分だけは残った、といえないだろうか。

いずれ、すべての言葉がたどる運命なのだろう。こういう言葉の風化^{*}は、やすらぎがあつていい。芭蕉はここまで予想していただろうか。

古池の句は、俳句には十七字の言葉のほかに、言葉にならない「場」というものがあつて、俳句の言葉は「場」を前提に

しているということを教えてくれる。

そして、俳句がわかるには、俳句の言葉がわかるだけでなく、その俳句の「場」がわからなければならぬ。俳句の「場」に参加しなければならぬ。いいかえると、俳句が通じるためには、作り手と読み手の間に「共通の場」がなければならぬ。

俳句にとっては言葉と同じくらい、言葉以前の「場」が問題だ。 C、俳句を読むということは、その句の「場」に参加することなのだ。

これは俳句が十七字しかないところから来ていると思う。飯に小説のように長ければ、言いたいことをすべて言葉にできる。当然、言わない部分が多くなる。作り手と読み手の間に黙^{だま}っていてもわかり合える「共通の場」がなければならぬ、ということになる。

しかし、むしろ、逆にそういう「共通の場」があつたからこそ、俳句という短い文芸が生まれた、と考えた方がいい。古池の句で、其角が山吹を進言したのは『古今集』の歌が念頭にあつたからだ。『古今集』や『伊勢物語』*『源氏物語』のような古典は、当時の俳諧の座に連なるほどの人なら、だれでも十分に読みこんでいただろう。そういう席では、前提となつている古典をいちいち言葉にしておく必要はないし、言葉にしたりするとかえって野暮^{やぼ}したい。黙^{だま}っていた方がいい。人々の間のこの暗黙^{あんもく}の濃厚^{のうこう}な「共通の場」を最大限に生かそうとしたとき、発句^{はっく}という短い詩の形式が生まれたのではないだろうか。

⁴俳句は仕方なく短いのではなくて、進んで短くなったのだ。

D、俳句が「場」に根ざしているというこの特質は、つきつめてゆくと、言葉自体の性質に行きつくだろう。

言葉は、会話のように、はつきりした具体的な「場」のあるところでは、短くても、いきいきと躍動^{やくどう}する。しかし、法律

や数学の文章のように「場」を排除した抽象的な次元では、ただの記号になってしまう。
もともと言葉自体が「場」に深く根ざしているのだ。

こういう言葉の性質を積極的に活かそうとするところに、俳句のような短い文芸が成立しているともいえるだろう。

(二〇一三年 長谷川 権『俳句の宇宙』中公文庫)

〔注〕*芭蕉…松尾芭蕉のこと。江戸時代前期の俳人。

*閑寂…ひっそりとして落ち着いていること。

*山本健吉…昭和時代の文芸評論家。

*子規…正岡子規のこと。明治時代の俳人。

*一毫も…少しも。

*深川の芭蕉庵…現在の東京都江東区深川にあった芭蕉の住まい。

*句合せ…左右の組に分かれて俳句をたがいに作り、その優劣を競うもの。

*其角…宝井其角のこと。芭蕉の弟子。

*上五…俳句の五・七・五の最初の五音のこと。

*山吹…バラ科の落葉低木。黄金色に近い黄色の花をつける。

*かはづなくく…蛙が鳴く井出の里の山吹の花は散ってしまったよ、花の盛りに来て見ればよかったのに。

*『古今集』…平安時代初期に天皇の命によって編まれた和歌集、『古今和歌集』のこと。

*俳諧…俳句(発句)や俳文などの総称。

*因襲…古くから伝えられてきた風習。

問一 本文には次の一文が抜けています。どこに入れたらよいですか。この文の入る直後の五字を抜き出さない。
ところが、俳句は短いから、それができない。

*風化…記憶や印象が月日とともに薄れていくこと。

*『伊勢物語』『源氏物語』…平安時代に成立した物語文学。

問二 [A] [D] に入るのにふさわしい語の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア A しかし B すると C そして D さらに

イ A だが B そして C しかし D よって

ウ A あるいは B そこで C しかも D だから

エ A もしくは B さらに C そのうえ D また

問三 [X] に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 芭蕉の作った俳句を評価する立場

イ 和歌の言葉の因襲を批判する立場

ウ 伝統的な和歌の世界を継承する立場

エ 革新的な俳諧のあり方を提起する立場

問 四 傍線部1「其角の進言」について、次の問いに答えなさい。

① 其角は、芭蕉にどのような進言をしましたか。次の□に入る言葉を、文中から十五字以内で抜き出し、答えなさい。

芭蕉に対して、其角は□
ないかと進言した。

② 其角が①のような進言をしたのはどうしてですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 和歌の伝統的な取り合わせを利用しながら、その季節の情景も詠み込むことが当時の俳諧の基本的な考え方であったから。

イ 当時の俳諧においては、和歌を古臭いものとして捨て、新しい取り合わせを創造することが何より重要視されていたから。

ウ 当時の俳諧では、和歌の慣習に倣った表現を尊重しながらも、そうした表現をすべて避けることが通例となっていたから。

エ 和歌の世界における慣例的な表現をからかい、そうした伝統にあらがう姿勢を持つことが俳諧には必要だと考えていたから。

問 五 傍線部2「芭蕉の創造的批判の句」とありますが、その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 上五を「古池や」とすることによって、和歌の伝統的な取り合わせを利用せずに、和歌に批判的な俳句を詠むことが不可能であることを示し、芭蕉の考える和歌との向き合い方を提起した句であるということ。

イ 上五を「古池や」とすること、和歌の慣習に則った句でも、そうした和歌の慣習を皮肉った句でもない、まったく新しい美的世界を創り出し、芭蕉独自の俳諧のあり方を提起した句であるということ。

ウ 上五を「古池や」とすること、伝統に反し、決まりきった和歌の表現を前提としない句ばかりが批判されていた当時の俳諧のあり方に対し、芭蕉の考える和歌との向き合い方を提起した句であるということ。

エ 上五を「古池や」とすることによって、和歌の慣例的な表現に倣いながらも、当時の俳諧のあり方とも同調するような絶妙な世界観を描き出し、芭蕉独自の俳諧のあり方を提起した句であるということ。

問 六 傍線部3「残ったのは、古池にカエルが飛びこんで水の音がした——ただ、これだけである」とありますが、それはどうしてですか。その理由を説明した次の文の□に入る言葉を、文中から十字以内で抜き出しなさい。

この句にあったはずの創造的批判の意味が時代とともに薄れていき、□の描写だけが残ったから。

問 七 傍線部4「俳句は仕方なく短いのではなくて、進んで短くなったのだ」とありますが、それはどうしてですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 俳句では作り手も読み手も人生経験や特別な知識が必要とされるため、それらを身につけていないと理解するのにも苦労するが、一度習得してしまつたら短い言葉だけで互いにやり取りができるものだから。

イ 俳句に親しむような人々の間では、共通して持っている知識や教養などが多く、そのすべてを言葉にしなくても理解できる上に、言葉にしすぎないほうが良いという価値観が根づいているから。

ウ 俳句を楽しむためには作り手と読み手の両方に古典作品を十分に読みこんでくることが求められるため、作り手はそれらを元にした知識や教養から発せられる多くの言葉から選択して表現する必要があるから。

エ 俳句がすべてを言葉にしないほうが良いとされるのは、本当はくわしく説明したほうが伝わりやすい作り手の気持ちをおろそかにし、読み手に想像させることで、作り手が考えていた以上の広がりを見せるものであるから。

問 八 本文の内容と合っていないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、「古池や」の句に対する山本健吉や正岡子規の解釈に対してなかなか納得できずにいた。

イ 「古池や」の句が詠まれた芭蕉庵での蛙の句合せの場には、芭蕉の弟子が何人か同席していた。

ウ 「古池や」の句が高く評価されるのは、各務支考の『葛の松原』の記録が残されているからだ。

エ 言葉というものは使用される具体的な「場」の有無によって、その性質が変化するものである。

二 次の文章は、小川洋子の「かわいそうなこと」の一部です。これを読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合により本文の一部を改変しています)

今のところ僕の手元にある、かわいそうなことリスト、のトップに挙げられているのはシロナガスクジラだ。その子とは社会科見学の時に行った自然史博物館で出会った。地面には置き場所がないから、まあ許してくれたまえ、とでもいう感じで天井から吊るされ、宙に浮いていた。しかも全身、骨だった。

「シロナガスクジラは地球上で最も大きな動物です。過去に絶滅したすべての動物を合わせても一番です。ここに展示している骨格標本は体長三十メートル、体重は百七十トンあります。食べ物はオキアミです。ニューファンドランド島の海岸に打ち上げられているところを発見されました」

博物館の人が説明してくれている間中ずっと、クラスの皆は「でか」「でかすぎ」「ありえない」と A お喋りし、先生がいくら注意しても聞かなかった。

僕は黙って骨を見上げ、心の中でつぶやいた。

「もう分かったよ。それ以上言うな。この子だって自分が大きいことくらい、よく分かってるよ」

だから本来ならばこの言葉を使いたくはないのだが、確かにシロナガスクジラは、大きかった。他に表現の仕様が思いつかなかった。

骨はちよūdい具合に焼けたクッキーのような色をしていた。長持ちさせるために薬でも塗つてあるのか、時間が経てば自然とそうなるものなのか、表面は滑らかで、 B して見えた。体長の四分の一くらいを占める顎は、上下の骨

が合わさって緩やかなカーブを描き、その付け根にある胸びれは人間の手とそっくりの形をし、あとは背骨がどこまでも長々と続くばかりだった。背骨を構成する骨たちは皆同じ形を持ちながら、先頭から最後尾まで大きさが少しずつ小さくなっていた。何もかもすべてが左右対称だった。大きすぎるせいで隅の方には規則が行き届いていない、などといういい加減なことにはなっていないかった。どの骨もお利口に自分の居場所を守っていた。

真下に立ち、どんなに目を見開いても、彼（僕は勝手に男の子だと思い込んでいた。どこの骨でそのところを見分けるのか、博物館の人は教えてくれなかった）のすべてを瞳に映すのは不可能だった。頭に焦点を合わせれば背骨が途切れ、尾まで網羅しようとすれば顎の先が視界から消えた。月でさえ丸ごと目に収まるのに、この子ははみ出してしまふのだった。

体長は十一階建てのビルに相当するとか、舌だけで象一頭分の重さがあるとか、博物館の人は相変わらず彼の巨大さを強調する話ばかりしていたが、月より大きいという自分の発見の方に僕は心奪われていた。そんな体を持って生まれる人生がどんなものなのか、僕には想像もできなかった。大勢の友だちと一緒に C 楽しんだり、逆に岩陰に隠れてのんびり静かな時を過ごしたりする自由は与えられていない。これほどの存在感を持ちながら、小さな目の魚にとってはただの間でしかないという矛盾を突きつけられている。自分の尾なのにそこは異国の地のように遠く、たとえ友だちになりたいと思つた誰かがそこを舐めて合図を送ってくれたとしても、返事が届くのは待ちくたびれて皆が立ち去ったあとだ。本当ならセイウチでもシャツでも一発でやつつけられるのに、遠慮して小さなオキアミしか食べない。自分で自分の体全体を見ようとしても自らの大きさに邪魔され、結局、自分がどんな生きものなのか知らないまま一生を終える。象やビルと比べられ、何かにつけ大きい一言でくくられ、挙句の果てには骨をさらされている。

もつと僕をいたたまれない気持ちにさせたのは、実物と同じ大きさで作られた心臓の模型だった。ゴム製のそれはくすんだ

赤色をし、表面に凹凸があり、言うまでもなく十分に大きかった。動脈と静脈は人が悠々すり抜けられるくらいの太さがあった。クラスメイトたちはピノキオにでもなった気分で心臓によじ登り、万歳をしたり腹はいになったりして次々血管を滑り降りていった。僕は彼の心臓を遊び道具にすることなどとてもできず、尾びれの最後の骨の下にただ黙って立っていた。僕に気づいて声を掛けてくる友だちは一人もいなかった。

皆が潜り込むと、柔らかいゴムが D して、本当に心臓が動いているように見えた。ニューファンドランド島の海岸に打ち上げられ、人々から無遠慮に写真を撮られたり棒で突かれたりしながら、それでも弱ってゆく体でどうにか最後の鼓動を刻もつとしている心臓だった。

5 そのあと何を見学したのか、一つも覚えていない。本当はシロナガスクジラのそばにずっといたかったのだが、そんな勝手が許されるはずもなく、先生に促されるまま列の最後にくっついて歩いた。でも心の中はあの子で一杯だった。目には入りきらないけれど、心の中には顎から尾まで全部が収まった。そのうえ吊るされた骨ではなく、海にいた時と同じ、肉も鱗も噴気孔もついた本当の姿に戻っていた。

地図も持たずに君は、尾びれを振り上げ、背骨をしならせ、僕の中を泳いでゆく。きっと賢い君だけに見分けられる印があるのだろう。ちっとも迷ったりしない。小さな魚たちを驚かせないように、動きはあくまでもゆったりしている。海流が君のすべすべした体を包んでいる。他の誰も真似できない雄大な移動が為されているとはとても信じられないくらいに、あたりは静けさで満たされている。

もし神様が「順番に並んで」と号令をかけたなら、一番に返事をして先頭に立たなければならぬのは君だ。勇氣あるものにしか務まらない役目だ。絶滅した動物たちを動員しても尚、君の代わりになれるものはいない。全世界を従え、月にも優

る尊さを内に秘め、最も強い風を受けながら、たった一人耐えている闘士。それが君なんだ。

かわいそうなことリストを記録するためのノートはお兄ちゃんにももらった。元々はお兄ちゃんが野球のスコアをつけていたノートだった。去年の秋、チームが地区大会で優勝した時、ご褒美に正式なスコアブックをパパからプレゼントされ、いなくなつたお古を僕にくれたのだ。だから最初の方のページには、打点3とか左二塁打とか捕エラーとか、わけの分からないことが書いてある。そのところは飛ばして、そのあとのまっさらなページからがいよいよ僕のノート、ということになる。

これは誰にも見せないと決めている。病気で長い間入院しているおばあちゃんにも頼まれたとしても、たぶん心を鬼にして断るだろう。ましてやママの目に触れたりすれば大変なことになるから、テストや宿題のプリントやドリルを仕舞っている机の引き出しの、一番奥に隠している。いつだったか奥に突っ込みすぎて引き出しのどこかに引っ掛かり、表紙が折れ曲がってしまった。ただ、油性ペンで精一杯丁寧に書いたタイトル「かわいそうなこと」が歪み、本当にかわいそうな雰囲気醸し出す結果になったのは、ノートのためにはむしろ都合良かったかもしれない。

正直に告白すれば、気持をありのままに記すのはとても難しい。自然史博物館から帰って来た日も、すぐにノートを開き、シロナガスクジラについて書くこととしたのに、いざ鉛筆を手にとってみると、どこからどう始めていいのか混乱するばかりだった。心の中で間違いなくシロナガスクジラは泳いでいる。海面に透ける流線型の影も見え、海流を震わせる心臓の鼓動も聴こえている。もちろん骨一個一個の形までも再現できる。なのに言葉は浮かんでこない。

僕と机の上のノート。見た感じではさほど離れてはいない。手を伸ばせばすぐに触れられる。けれどいざ心の中身をページに移動させようとする、途端に果てしもない空白が現れる。それが不思議でたまらない。僕は鉛筆を握りしめ、空白をじっと見つめ、かわいそうな気持があふれそうになるのを感じつつ、どうにか一言三言、書きつける。的確な言葉を見つけたというのではなく、苦し紛れに吐き出したという感じだ。そういう言葉たちは四球、代打、三振、と同じくらい頼りなく、たどたどしい。かわいそうなことは、もっと正確な言葉で記録されるべきだ、そうでなければ本当の慰めになどならない、とよく分かっている。ノートを広げるたび、僕は申し訳なくたまらなくなる。シロナガスクジラの心臓で遊んでいた子より、自分の方がずっと残酷なのではないか、という恐れにさいなまれる。鉛筆が止まったあとも、すぐにノートを閉じる気になれず、いつまでもページの白いところを見つめながら、リスト入りした彼らについてあれこれ思いを巡らせる。世界中が君を馬鹿にしたって、僕だけは味方だと、空白に向かって語り掛ける。そうやって僕なりに罪滅ぼしをする。

(二〇二〇年 小川 洋子『口笛の上手な白雪姫』幻冬舎文庫)

〔注〕*オキアミ…エビにそっくりな形のプランクトン。

問 一 文中の **A** **D** にあてはまる語として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号は入りません。

- ア てかてか イ ざわざわ ウ わいわい エ ざいざい

問 二 傍線部1「かわいそうなことリスト、のトップに挙げられているのはシロナガスクジラだ」とありますが、「僕」は「シロナガスクジラ」のどのようなところが「かわいそう」だと思っているのですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他の大きな海の生物に遠慮して、小さなエサしか口にしない上に、自分の大きさを認めようとしないうところ。
- イ 人よりはるかに大きいものと比較ひかくされて「大きい」ことだけが語られ、他のものと交こわらず孤独こどくに耐えているところ。
- ウ 大きすぎることで、海の中を泳ぎ続けているうちに背骨の端はしの方が不規則にゆがんでしまっているところ。
- エ 勇気あるものとして神に認められているがゆえに、どんな状じょう況きょうでも先頭に立って戦わなければならないところ。

問 三 傍線部2「月より大きいという自分の発見」とありますが、シロナガスクジラが月より大きいというのはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問 四 傍線部3「小さな目の魚にとってはただの闇でしかないという矛盾」とありますが、これはどういうことですか。説明したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 小さな魚にとっては、巨大さばかりが強調されるような大きいクジラの人生がどんなものかは、まったく想像できないということ。
- イ 魚たちが友だちになりたいと思って合図を送ったとしても、返事が届くのはずいぶん先のことになってしまうので、クジラが存在が異国のもののように感じられるということ。
- ウ 圧倒あつとつ的な存在感を持っていながらも、小さな動物にとってはその全体を見ることはできず、そこにいると実感できないということ。
- エ 視野の広くない魚たちにとっては、シロナガスクジラもセイウチやシャチと同じように、ただの黒い大きな物体に見えないということ。

問 五 傍線部4「もつと僕をいたたまれない気持ちにさせたのは、実物と同じ大きさで作られた心臓の模型だった」とありますが、この時の「僕」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 骨だけでなく心臓までもが、巨大なものとして皆の目の前にさらされているのが不憫ふびんであり、さらにクジラに敵対心を持つて遊んでいるクラスメイト達の残酷さに暗い気持ちになっている。

イ 心臓で遊ぶことは、道徳的に良くないことだと思いつながら、遊びに加わらないでいる自分に、気づいて声を掛けてくれる友達が一人もいないことに孤独を感じている。

ウ 命の象徴しやうちやうである心臓が、模型とはいえず子どもたちの遊び場となっているのを見て、すべてを人々にさらされながらクジラの命が尽きようとしている姿が想像されてつらくなっている。

エ 皆が動脈と静脈の模型を滑り降りることで、ゴムが伸び縮みして、心臓が動いているかのように見えることが気分良く思えず、ただ黙ってその時間をやり過ぎそうとしている。

問 六 傍線部5「そのあと何を見学したのか、一つも覚えていない」とありますが、この時の「僕」について説明したものととして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かわいそうなシロナガスクジラのことを頭から離れず、何とかして不自由なこの場から解放してやりたいという気持ちが強くなった。

イ シロナガスクジラのこと気がなるうちに、大海原おおうなばらを生き生きと泳ぎわたっていく姿が想像され、他のすべてののが意識の外にあった。

ウ 自分を気づかってくれる友だちもいない中での見学はさびしくてたまらず、同じような境遇きやうぐうにある孤独なシロナガスクジラのこと気がなるって仕方がない。

エ 人々にひどい扱いあつかを受け、どんどん弱っていくシロナガスクジラのこと心配でたまらず、他のことを何も考えることができなくなっている。

問 七 傍線部6「ノートのためにはむしろ好都合だったかもしれない」とありますが、これは何がどのような点で「好都合」だったのですか。「〜ということ」に続く形で説明しなさい。

問 八 傍線部7「心の中身をページに移動させようとすると、途端に果てしもない空白が現れる」とありますが、これはどういうことを表した比喻ひゆですか。ほぼ同じ内容を表した部分を、文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問 九 本文を読んだ四人の小学生が、次のような会話をしています。本文の内容をふまえて、①・②に入るものとして最も適当なものを、次の各群のア～エの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

生徒A―この文章の「僕」は「かわいそうなこと」をリストにしてノートに書いてあるんだね。

生徒B―そうだね。そのリストの先頭に「シロナガスクジラ」がいるんだけど、文章の中には「シロナガスクジラ」についての描写がずいぶんくわしく書いてあるね。

生徒C―「僕」が「シロナガスクジラ」に心を寄せて、細かいところにまで、丁寧に向き合っていることが表れているんじゃないかな。

生徒D―私も「僕」の「シロナガスクジラ」に対する強い思いを感じたわ。特に「君」という呼び方には、①がみられると思うな。

生徒A―もつともつと言葉を尽くして、「シロナガスクジラ」への気持ちをノートに書こうとしてるんだけど、うまく書けないといっているね。

生徒B―気持ちを言葉にするのは難しいんだけど、「かわいそうなこと」は、もつと正確な言葉で記録されるべきだ」というのはどうということなんだろう。

生徒C―そうできないと「慰め」にならないってあるね。

生徒D―リスト入りした彼らに「世界中が君を馬鹿にしたって、僕だけは味方だ」とあるから、②のかもしれないね。

生徒A―だから、ちゃんと向き合って理解して、言葉を尽くしてそれを正確に書きたいって言ってるんだね。

① ア 自分の方が優^{すぐ}れていると相手を見下している姿勢

イ 対等な存在として相手のことを尊重している姿勢

ウ 自分も相手と同じようになりたいとあこがれる姿勢

エ かわいそうな相手を自分が守るのだという強い姿勢

② ア 思うようにならない毎日を何とかするために、自分の力で前に進んでいきたい

イ 今までの弱い自分を捨てて、誰かのために強くありたいという願いが込められている

ウ 自分たちにつらくあたったものたちのことは、決して忘れないという強い憤^{いきじ}りを表している

エ 誰にも理解されずに孤独な自分と「かわいそうなこと」リストに載^のっているものが重なる

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の文の傍線部は言葉の使い方がまちがっています。傍線部全体を正しい形に直しなさい。
(ひらがなで答えてもかまいません)

友人とけんか別れしてしまい、目覚めが悪い思いをする。

問二 歌集『みだれ髪』や『君死にたもうことなかれ』などの代表作で知られる女流歌人を、次のア～エの中から一つ選

び、記号で答えなさい。

ア 小野小町 イ 俵万智 ウ 樋口一葉 エ 与謝野晶子

問三 次の文で——部が直接かかっている部分を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

会社まで 自分の 車で 通っている 父は、 会社帰りに よく 花束を 買ってきてくれる。

問四 次の熟語と組み立てが同じ熟語を、ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

「教訓」 ア 静養 イ 預金 ウ 集計 エ 清潔

問五 次のことわざの意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

「齒に衣着せぬ」

ア 思っていることを遠慮せずに言うこと。

イ 同じことを何度も繰り返して言うこと。

ウ ありとあらゆる口ぎたない言葉を言うこと。

エ ちよつとしたことを大げさに言うこと。

